

退任にあたって

加藤 賢一



このたび大阪市立科学館館長を退任することになり、長年、お世話になりました友の会の皆様に一言、ご挨拶を申し上げます。

私の科学館人生は1974年の4月に始まりましてので、丁度40年でした。学生時代、仙台市天文台に出入りして、「こういう仕事もあるんだなあ」と知り、またまた募集案内が届いた大阪市立電気科学館に応募したところ採用されたのが始まりです。

プラネタリウムが主な仕事でしたが、友の会の維持も大きな仕事の一つでした。友の会は先輩の黒田武彦さん(1989年退職、兵庫県立西はりま天文台長、兵庫県立大学教授を歴任)の情熱によってでき上がったもので、科学館と市民をつなぐパイプであり、市民が科学館に集い、憩う場であり、これなくして社会教育施設はあり得ないとの信念により、余計な仕事を作るなという電気科学館の大勢を打ち破って実現できたものです。でも、それまで10年かかりました。黒田さんは友の会発足後ほどなく、この大阪市立科学館の開館を機に西はりま天文台に移りましたが、そこでは建物ができると同時に友の会を作ったほどで、友の会へ寄せる思いがよく分かります。

今ではどこの科学館にも友の会(つまり、会員組織)があって、なかったら奇妙に感じるほどです。なぜなら、誰のための科学館か、と問われかねませんから。でも、誰もが友の会に好意的かと言えばそんなことはありません。市民の代表と言われる方々からも注文があるほどですから、会員の皆さんが本当に必要なら必要と、折に触れて叫んで戴かないと、友の会はなくなってしまいます。反対に言えば、そうした声が出なければ、それは要らないものと判断されても仕方がないということです。

市民の思いを礎にして科学館は成立し、科学に思いを寄せる市民代表が友の会会員であるという黒田さんの主張は、何かと難しいこの時代だからこそ、その真価が問われています。そこで皆さんにお願いです。友の会会員をもう少し増やしませんか？そして一層、活発に活動し、科学館の行事に積極的に参加し、たまに科学館を助けて下さいませんか？これで友の会の役割は十分果たせたこととなります。贅沢を言えば、家庭や地域や職場で科学を、科学的な見方で話題にして戴ければこれに越したことはありません。

大いなる知的冒険に喜びを見出しているであろう友の会の皆様のますますのご活躍を期待しています。